農村集落における景観施策によって建設された共有物の立地特性に関する研究 −長野県開田高原を対象として−

5221D040-7　宮本知佳*

長野県木曽町開田高原では約 50 年に渡る独自の景観施策の蓄積がある．本研究ではこれらの施策のうち住民がその建設および設置に携わり現在は日常景観の一部として馴染んでいるゴミステーションと花壇に着目し，現地調査，建設・設置に関与した人物へのヒアリング調査，及びアンケート調査を行うことで，それぞれの立地に関する特徴を把握した．また，建設当時の場所決定経緯を把握し，ゴミステーション及び花壇という景観施策に関わる共有物が配置される重要な場所の特性として，前者では集落との位置関係，後者では観光客や地域住民の目と土地の利用価値が主に考慮されていることが明らかになった．

Key Words：日常景観，ゴミステーション，立地特性，地域自治，開田高原

1．研究の背景・目的

(1) 研究の背景

地域の計画を考える上では，現状の地域に存在する様々な構造を読み取り，地域の特性を把握する必要がある．その際に着目する構造とは社会構造や都市構造だけでなく，その地域に住む個々人がアイデンティティを持ち，地域への愛着を形成して来た場所から構成されるような「大切な場所の構造」[1)]や，人に進むべき方向や世界観を与える「聖なる場所の構造」[2)]もまた，地域住民の日頃の活動によって構築され，地域に顕れる構造としてこれまでに論じられてきている．そして，農村集落の住民の活動によってそれぞれ造り上げられてきた地物の配置にも，これらに類するような構造があるものと想定される．

本研究では景観法制定以前から住民を主体とした景観に関わる取り組みが実施されてきた地域の一つである，長野県木曽町開田高原を対象とする．開田高原は合併以前の旧開田村時代から景観に関わる施策を様々に展開してきた．それぞれの事業に関連して現存しているものは，いずれも地域の景観の改善や地域課題改善の為に，かつての住民がその建設や整備に携わったものでもある．そのような目に見える形で集落内に現存している地物が立地する場所は，その利便性などの為に，集落内の家家や神社や祠，河川や水路などとの位置関係に特徴がある場合もあれば，その場所からの眺めが魅力的であるなどのように，集落の中で共有物を置く場所としてのポテンシャルがある場所であった可能性が考えられる．よって，集落の共有物が立地する場所の特性を明らかにすることは，対象地における自治の観点から重要であり，地域で共有されるものが配置されるような大切な場所の構造を明らかにする事が出来ると考えられる．

(2) 研究の目的

以上のような背景を踏まえ，本研究では長野県木曽町開田高原を対象地として，これまでに行われてきた景観施策の一部に着目し，それらに関連して建設・設置されるようになった共有物の立地特性を明らかにすることで開田高原地域における集落の景観施策に関わる共有物が配置される重要な場所の特性を明らかにする．

２．既存研究の整理と本研究の位置づけ

(1) 既存研究の整理

本研究は農村集落を対象地とした，景観に関わる住民の活動による地物の立地に着目した研究であり，関係する既存研究としては a)農村集落の空間構成に関する研究 b)農村景観の特徴に関する研究 c)開田高原に関する研究を整理する．

*早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻 景観・デザイン 佐々木葉研究室 修士２年

a)農村集落の空間構成に関する研究

張[3]は京都府若狭街道沿いの地区を対象に，現存する石仏の安置場所と街道及び居住域の位置関係から，かつて重要とされていた場所の特性を明らかにした．轟ら[4]は様々な社会的要因により空間構成が変化しつつある農村集落に着目し，農村地域の集落空間の計画論構築を視野に，そこにある各要素同士のもつ連関，及びその連関が生まれた要因を明らかにした．

b)農村景観の特徴に関する研究

北澤ら[5]は農村景観における生産や生活の活動と景観との関係性を把握する為に，地域住民によって共同での管理がなされている水路に着目し，現地調査及び住民へのヒアリングから，対象地の水路や水路に沿った道路，民家などとの境界域において繰り返し見られる性質を明らかにした．大澤ら[6]は栃木県那珂川町小砂地区を対象地として，家屋周りの構成要素と土地利用配置の類型化を行い，更にこれらから構成される集落景観が美しく見えるその審美的原理の解明を進め，その結果として「生きられる空間」として視覚的に優美であることよりも，手入が行き届いていることなどの健康美ともいえる生態的安定から得られる心地よさが対象地における審美的原理であると結論付けられた．

c)開田高原に関する研究

藤倉らの一連の研究[7]では景観に関わる政策の効果が生まれる原理的解明が必要であるという認識の下，基礎自治体において行われた景観に関わる革新的な政策群が地域に好影響を及ぼした一事例として長野県旧開田村を対象とし，個々の政策が生まれる過程及び政策群が展開する過程を分析した．その結果，政策アクターと住民の日常的活動によって自治の基盤的なルールが定着し，時間的変化に伴った連携・協働の中で地域的ルールの刷新が行われるとした．また地域における景観と社会との関係性を明らかにするために，長野県旧開田村を対象として景観構成要素と社会的活動の関係性の実態を把握し，この構造が地域社会に及ぼす影響を考察する事で自治的観点から地域景観が有する意味を明らかにした[8]．

(2)本研究の位置づけ

以上の整理により，先行研究においては農村における特定の景観構成要素に着目しそれらの配置や意味合いから地域の変遷やその中で重要な場所を把握するものや,少子高齢化や過疎化が進む農村地域で,伝統的景観を保全するために伝統的環境を維持するシステムの展開などが行われていた．また，開田高原に関する研究ではそれぞれ景観構成要素と社会的活動や，政策に着目した研究が行われている．本研究は，ゴミステーションと事業によって設置された花壇を開田高原の景観施策に関する集落の共有物として捉え，これらの特徴とその立地の特徴から集落内の重要な場所を明らかにする点に特徴がある．

(3)研究の方法

本研究は現地調査，ヒアリング調査，アンケート調査により実証的にこれを進める．研究の流れとしては，先ず現地調査を実施し景観施策に関わる地域の共有物としてゴミステーションおよび事業による花壇の立地やその形状，状態等を把握する．ついでそれぞれの建設・設置に関与した人を対象としたヒアリング調査およびアンケート調査によって，建設時の立地場所の選定理由や決定方法を明らかにする．なお，本研究で扱うゴミステーション及び 2022 年度に整備された集落内景観整備事業の花壇については現地にて悉皆的にその立地と隣接物の調査を行った．調査概要を**表-1** に示す．

３．研究対象地の概要

(1)開田高原の位置・地勢

長野県木曽町開田高原は木曽町の北西部に位置し，面積 149.5km^2，人口 1,439 人(2020)[1]の農村地域である．現在の開田高原が包含されている木曽町は，2005 年に木曽福島町，日義村，三岳村，開田村が合併してできた町であり，長野県南西部の岐阜県との県境に位置する．開田高原とその周辺をつなぐ主要な交通経路は，地域内を東西方向に貫く国道 361 号線と，県道 20 号線である．周囲は山林に囲まれており，集落は海抜 1,070~1,240m の高地に位置している．地域の南西方向には標高 3,067m の御嶽山が位置し，地域内の様々な地点からその姿を眺望する事が出来る．

対象地の社会的特性としては，開田高原内には 15 の行政区があり，さらにその下に五人組と呼ばれる組織が存在している，五人組は集落内の自治や行政に関わる役割を担っており，かつて行われていた結いによる共同作業は現在でも五人組や数軒単位の取り組みで一部存続している[7]．

(2)開田高原の景観に関わる施策

開田高原では 1972（昭和 47）年の開田高原開発基本条例以降，様々な取り組みが行われてきた．それぞれの景観施策の開始年代とその目的および施策内

表-2　開田高原で行われてきた景観施策

事業名称	開始年	主な事業内容	事業名称	開始年	主な事業内容
開田高原開発基本条例	1972(昭和47)年	宅地や公共道路の造成，土地の開墾などに関わる事業者は前もって村長と「開発基本協定」の締結を行う必要があるとされ，1987（昭和62）年には適用対象地域が村内全域に拡大した．	屋根塗装ペンキ代助成事業	1990(平成2)年	景観に馴染まない色彩の屋根を茶系色に塗り替える際，坪当たり100円の助成がなされている．
銘木百選事業	1988(昭和63)年	各行政区長の協力の下，サクラ・マツ・コブシ等56件を保存樹木として銘木に指定した．また，土地所有者には認定証と記念の盾を贈呈した．	サインシステム整備事業	1995(平成7)年	1982（昭和57）年にはそれまでの野立て看板の撤去と茶色の木造看板に白文字の統一されたデザインのものが設置，1995（平成7）年には更に改良された統一デザインの看板が国道や村道の主要な交差点等に設置された．
沿道景観整備事業	1989(昭和64)年	開田高原の入り口である新地蔵トンネルから約890mに渡って国道361号線沿道の私有地両側約70mを行政で借地し，現在も白樺林として管理を行っている．	外部機関への協力要請	1994(平成6)年	電話線や電柱などの茶ポール化や電話ボックスの改良が外部機関の協力により行われた．
集落内景観整備事業	1989(平成元)年	当初は15の行政区に毎年定額の補助金を出し，それぞれの区が独自に景観整備を行っていた．現在は花壇整備，野焼き，支障木伐採もしくは外来植物除去が行われている．	ゴミステーション事業	2002(平成14)年	行政区が整備するゴミステーションの建設費を1/2（上限有）まで補助する事業．ゴミステーションは周囲の景観と馴染むように，木製の切り妻屋根が推奨された．

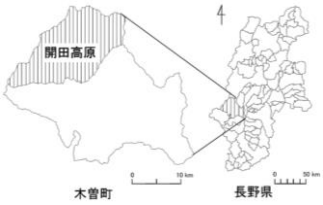

図-1　長野県木曽町
開田高原の位置

図-2　ゴミステーション

容を表-2 に示す．藤倉ら[8]は，これらの景観施策をその制定された時期と政策の目的によって三つに区分しており，第Ⅰ期(1972~1978 年)は，乱開発防止のために開田高原開発基本条例を制定し自然環境景観の保全が目的であり，第Ⅱ期(1979~1986 年)は，サインシステム整備事業などにより自然景観を活かすことを目的に阻害要因の管理を行った．第Ⅲ期(1987~2004 年)は地域景観の保全と魅力の向上を目的として政策が行われたとしている．

(3) 本研究で着目する事業

本研究では数ある施策の中でも，当初の建設や設置に地域住民が関与し，かつ今日まで現存して利用や維持管理などが行われているゴミステーションと集落内景観整備事業による花壇に着目する．

a)ゴミステーション事業（2003（平成 15）年～）

開田高原には数軒から十数軒程度の住宅につき一箇所，家庭ごみを収集する小屋であるゴミステーションが設置されている．これらは住民らが自らの手で建設したものであり，かつてのゴミステーションは,昭和 50 年代に村が補助を出して地区ごとに整備を行ったものであった．当時のものは鉄骨に波トタンを張り付けたような簡単なものが多かった為，老朽化や景観上好ましくないという状況が問題視されていた.そこで末川地区に位置する行政区において，これを自主的に木造・切り妻のゴミステーションに作り替え，事後にその補助金を区長会経由で要望したことが発端となり，2003（平成 15）年度からゴミステーションの建設について，資材費用の 1/2（最大限度額 7 万 5 千円）が補助される運びとなった．また，地元材の活用および景観への配慮を条件に上記の補助がなされ,現在までに開田高原地域で 74 件のゴミステーションが整備されている（補助対象外のものも含む）．また，行政区によっては 1 組の伍人組につき 1 箇所のゴミステーションが割り当てられている場所もある．

表-1　現地調査の概要

調査対象	開田高原地域全域のゴミステーション（74件）， 2022年度の集落内景観整備事業によって整備された花壇（34件）
実施日	2021/11/19-21, 2022/7/13-15, 2022/8/24,26
調査方法	場所の特定，隣接物の把握，写真撮影

表-3　ヒアリング調査の概要

調査日程	対象者	内容
2022/8/24	T氏（地元大工）	事業開始時の取り組み，小野原地区 ゴミステーション建設当時の詳細等
2022/8/24	O氏 （髭沢区長経験者，町議会議員）	ゴミステーション事業の補助金詳細, 髭沢地区のゴミステーション改修, 集落内景観整備事業の事業内容, 事業費用の変遷等
2022/8/26	S氏（地元大工）	事業開始時の取り組み, 向筋地区ゴミステーション建設当時の詳細等
2022/10/31	F氏（馬橋区長経験者）， U氏,N氏,O氏（開田支所職員）	馬橋区の花壇5箇所の選定理由, 集落内景観整備事業の事業内容の変遷等
2022/10/31	O氏 （髭沢区長経験者，町議会議員）	髭沢区の花壇2箇所の選定理由，管理主体等
2022/11/1	H氏（地元大工）	大屋地区リサイクルステーション建設経緯, 住民との役割分担等
2022/11/1	F氏（地元大工）	下条地区のゴミステーションの立地場所選定経緯等
2022/11/2	M氏（地元大工）	藤沢地区ゴミステーション形状決定経緯等
2022/11/2	M氏（大明区長経験者）	大明地区の花壇4箇所の選定理由, 場所の変遷等

表-4　アンケート調査の概要

対象者	開田高原の住民
配布方法	2022年11月25日実施の区長会を通した配布
回収方法	2022年12月9日実施の区長会を通した回収
配布数 回収数	〈ゴミステーションに関するアンケート〉配布数：74部，回収数：68部(91.8%) 〈花壇に関するアンケート〉　配布数：34部，回収数：30部(88.2%)

b)集落内景観整備事業（1989（平成元）年～）

景観づくりのためには住民自身による取り組みや景観に関する意識向上が必要であるとして，集落内

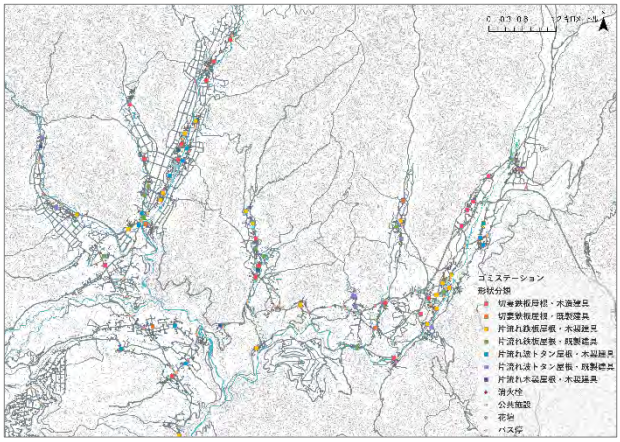

図-3　ゴミステーションの形状による類型の分布

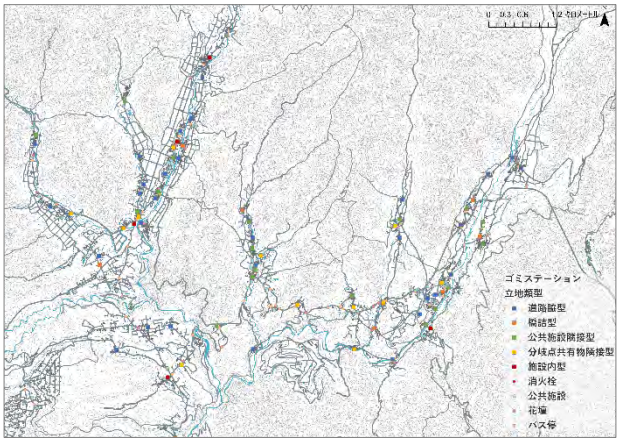

図-4　ゴミステーションの立地・隣接物による類型の分布

景観整備事業は開始された．事業開始当初は開田高原に位置する 15 の行政区にそれぞれ 10 万円の補助金を交付し，地区ごとの自由な発想に基づいた景観整備が行われていた．その一例としてフラワーロードや花壇の設置，河川整備，除間伐などが行われてきた．現在は花壇整備・野焼き・支障木伐採もしくは外来植物除去を行うとまとめて 5 万円の補助が出る制度となっており，花壇に関しては準備・植え付け･片付けと,年に三回程度の作業が行われている．

4．ゴミステーションとその立地の特性

本研究が対象とする開田高原におけるゴミステーションは，ゴミ収集という公共サービスを享受するインフラ的側面，住民がその建設や管理を行っているという普請的側面，景観施策の対象として周囲の景観に馴染むようなデザインを施されたという景観構成要素的側面を併せて持つものである．本研究ではその立地特性を捉えることで，集落内における重要な場所の特性を読み取る．本研究で実施した調査は現地調査(**表-1**)，ヒアリング調査(**表-3**)，アンケート調査(**表-4**)の 3 種類である．

(1) 形状による類型化

現地調査で確認した全 74 件のゴミステーションには屋根形状や素材，建具などに様々なバリエーションが見られた．本項ではその形状に着目してゴミステーションを分類する事で，その特徴を見出していく．分類には以下の要素を含んだゴミステーションのデータセットに対して階層クラスター分析を実施した．分析には統計ソフト R を使用し，ward 法を用いた．なお，類型化に用いた要素は建具（木製建具，既製建具），屋根素材（鉄板，波トタン），屋根形状（切妻，片流れ），大きさ（大型，通常）である．

表-5 に得られた類型についての詳細を整理する．また，類型ごとのゴミステーションの位置をプロットした地図を，**図-3** に示す．

(2) 立地・隣接物による類型化

地域内のゴミステーションには，単独で存在しているものもあれば，バス停や消防設備，花壇など，何か他の共有物とも隣接して存在しているような場所もある．分類には以下の要素を含んだゴミステーションのデータセットに対して，コレスポンデンス分析を 3 軸で実施後，その値を用いて階層クラスター分析を実施した．階層クラスター分析には統計ソフト R を使用し，ward 法を用いた．なお，類型化に用いた要素は隣接物の有無（河川・水路，祠，墓地，防火水槽，消火栓，ホース格納庫，バス停，大木，花壇，新聞受け，その他公共施設）/立地場所（道路脇，橋詰，分岐点，敷地内）/道路幅　（2 車線以上，2 車線未満）である．

表-6 に得られた類型についての詳細とその立地を整理し類型ごとの位置を**図-4** に示す．

(3) 2 つの類型の関係性

(2) で得られた立地類型に占める (1) の各形状類型割合を**図-5** に示し，特徴的な点を以下に記述する．公共施設隣接型の立地には切妻鉄板屋根・木製建具が占める割合が他の類型と比較して高い．また，分岐点共有物隣接型には片流れ波トタン屋根・木製建具および片流れ鉄板屋根・木製建具が占める割合が高い．また，橋詰型には片流れ鉄板屋根・既製建具が占める割合が高く，道路脇型は特徴的にその割合の高い形状は無くばらつきがあるといえる．

(4) ヒアリング調査よるゴミステーション建設経緯

ゴミステーション建設当時に中心的に関わった大工を対象としたヒアリング調査を行った．調査結果

はヒアリングデータとして書き起こしを行ったのち，グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析を実施した．本章では分析結果を整理し，ゴミステーション建設当時に大工および住民によって考慮されていた点や考え方を整理にする．

本節で実施するグラウンデッド・セオリー・アプローチとは社会科学分野で生み出された，データに基づいて理論を生成する手法の一つであり，書き起こしデータを切片化したものから得たラベルのうち，類似内容の集合から成るカテゴリー同士の関係性を整理し，カテゴリー関係図に示すことで現象を把握するという手順で本研究の分析は実施した[9]．

以上の分析により得られた「各集落のゴミステーション建設」という現象に対するカテゴリー関係図を**図-6** に示す．まず地区ごとの建設の際には豊富にある話し合う機会で徐々に議論が行われ，デザイン，立地場所，作業や金銭に関わる住民の負担の内容が集会で最終決定が行われた．この中でもデザインの決定には大工の地域のものづくりに対する想いや住民との普段の関係性が反映された．また立地の検討の際には集落の手前で収集車の来やすいこと，地主の許可が下りること，住宅との距離，各家から等距離であること等が考慮されていた．実際の建設時には大工による細かなサービス等によって看板や踏石などの細部の形状の違いが生み出された．

(5) アンケート調査によるゴミステーションの特徴

ヒアリング調査によってその立地選定理由を把握できたゴミステーションはわずか一部である．よって開田高原全域のゴミステーションの特徴を把握する為に，全 74 件のゴミステーションに対して実施したアンケート調査の結果を本節で整理する．

得られたアンケート調査の回答を (1) (2) で得られた類型ごとに集計し，その特徴を把握する．**図-7**，**図-8** のそれぞれに，形状類型および立地類型ごとに立地選定理由として各選択肢が選択された割合を示す．**図-7** の形状類型と場所選定理由の関係を見ると，片流れ波トタン屋根を有する類型は他のものに比べてゴミ収集ルートからの要請が割合として大きい．また，**図-8** の立地類型と場所選定理由の関係を見る

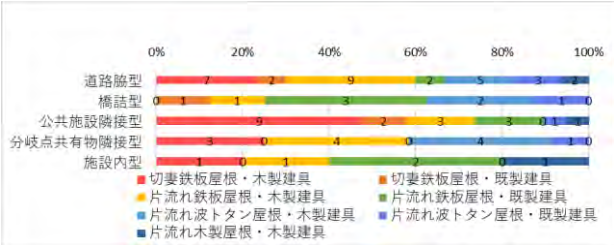

図-5　ゴミステーションの 2 つの類型の関係性

表-5　ゴミステーションの形状による類型

類型	特徴		類型	特徴	
切妻鉄板屋根・木製建具（20件）	切妻型の鉄板屋根を有し木製の建具が使用されている．大型のものは2件のみでそれ以外は通常の大きさであった．		**片流れ鉄板屋根・既製建具（10件）**	片流れ型の鉄板屋根を有し既製品の建具が使用されている．	
切妻鉄板屋根・既製建具（5件）	切妻型の鉄板屋根を有し既製品の建具が使用されている．類似の形状は無くそれぞれが異なった形状を有している．		**片流れ波トタン屋根・木製建具（11件）**	片流れ型の波トタン屋根を有し木製の建具が使用されている．	
片流れ鉄板屋根・木製建具（18件）	片流れ型の鉄板屋根を有し木製の建具が使用されている．類似のものは無く全て固有のデザインとなっている．		**片流れ波トタン屋根・既製建具（6件）**	片流れ型の波トタン屋根を有し既製品の建具が使用されている．建具にはガラス戸，金網戸，シャッター等がある．	
			片流れ木製屋根・木製建具（4件）	片流れ型の木製屋根を有し木製の建具が使用されている．4件とも他の類型と比較すると小ぶりな大きさである．	

表-6　ゴミステーションの立地による類型

類型	特徴		類型	特徴	
道路脇型（30件）	道路脇に立地し隣接物が無く単独で存在しているものは30件のうち17件と過半数を占めている．		**公共施設隣接型（19件）**	13件が分岐点，6件が道路脇に立地するものであり，バス停，集会所，消防設備等が隣接する．	
橋詰型（8件）	橋詰に立地していた8件全てが分類され、消火栓とホース格納庫，バス停と花壇がそれぞれ1件ずつのゴミステーションに隣接しており，他の6件は橋詰に単独で立地している．		**分岐点共有物隣接型（12件）**	12件全てが分岐点に立地し，祠，墓地，消防設備，大木，新聞受けといった，数軒の住宅に共有されているものが隣接しているものが多い．	
			施設内型（5件）	施設内型は全5件が学校や開田支所などの専用であり，敷地内に立地する．	

と，消火栓などの数軒程度での共有物と隣接する分岐点共有物隣接型は利用する各家からの距離，土地提供者の同意の項目が選択された割合が他のものよりもわずかに低く，既に共有物を配置する場所として存在していた場所を利用したと考えられる．

(6) 小括

本章ではゴミステーションを対象としてその形状および立地による類型化を行ったのち，アンケートの回答状況から，その立地選定理由について，類型ごとの傾向把握を行った．加えて，ヒアリング調査より各ゴミステーションの場所を決定する際に考慮された点を把握した．また立地類型間の比較により，橋詰型では住民による作業や金銭面での負担が比較的多かったこと，公共施設隣接型では大工が中心となることが多く実際切妻鉄板屋根・木製建具のものが多い事，分岐点共有物隣接型では大工と住民がそれぞれ役割分担をしていたことが読みとれた．

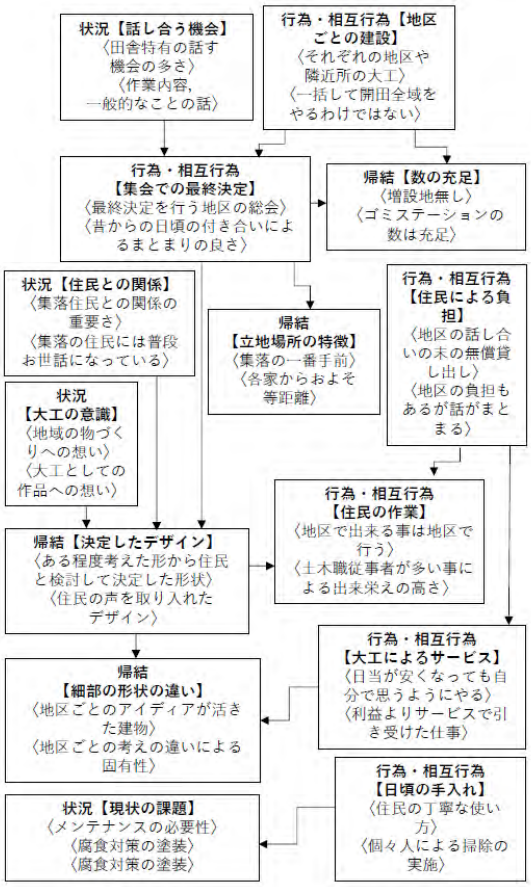

図-6　ヒアリングによる各集落のゴミステーション建設に関するカテゴリー関係図

5. 集落内景観整備事業による花壇の立地特性

本研究が対象とする開田高原では，住民が主体となって景観に関わる事業として，集落内景観整備事業という事業が行われてきている．この事業の一環として整備されてきた花壇は，前章で述べたゴミステーションがインフラ的側面を持っていたのとは異

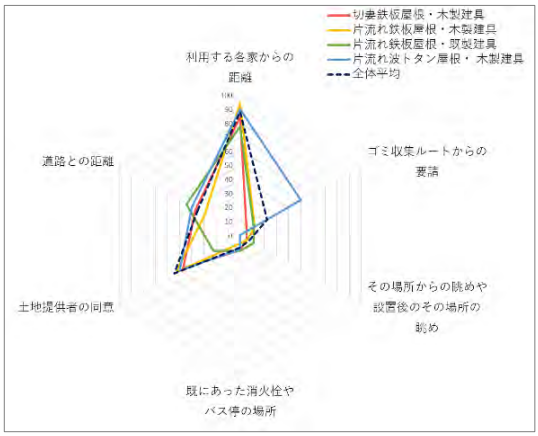

図-7　形状類型ごとの立地選定理由

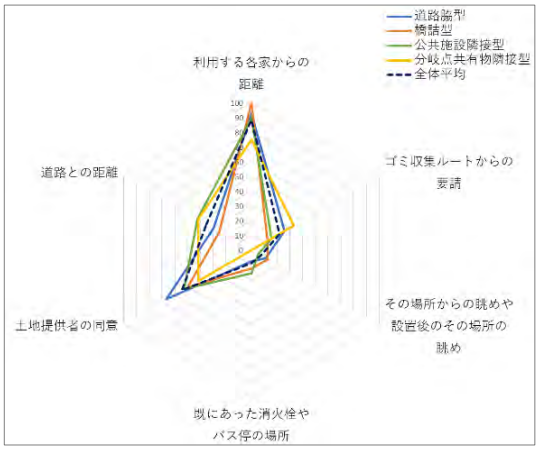

図-8　立地類型ごとの立地選定理由

表-7　建設時の役割分担，経緯に関する傾向の類型間の比較

類型	計画の主体		設計		デザイン		建設時の住民協力		土地所有		補助金利用		場所の変更		改修		管理の当番制	
	当時の区長	大工	行政区内	行政区外	大工に一任	住民意見有	有	無	公有地	私有地	有	無	有	無	有	無	有	無
橋詰型	◉		○			◉	◉			○		◉		◉		○		○
公共施設隣接型	○		○		◉		○			○	○			○		◉	◉	
分岐点共有物隣接型	○		◉		○		○			◉	◉			○		○		◉

○ 各類型の件数が多い項目　◉ 各項目の件数が多い項目　◉ 各類型・項目で件数が多い項目

なり，景観をより良くするため，というのが主な目的として整備されてきたものである．本章では前章で整理したゴミステーションの立地特性との比較を念頭に，この花壇の立地の特性を明らかにする．

(1) 立地による類型化

現地調査では 34 件の花壇の道路との位置関係や隣接物について，詳細に把握した．分類作業は以下の要素を含む花壇のデータセットに対して，コレスポンデンス分析を 3 軸で実施後，その値を用いて階層クラスター分析を実施した．階層クラスター分析には統計ソフト R を使用し，ward 法を用いた．以上によって得られた花壇の立地の類型を**表-8** に示す．

(2) ヒアリング調査による花壇設置の経緯

集落内景観整備事業を利用した花壇の設置に関わった元区長経験者の住民を対象に，花壇の立地場所選定の経緯や，集落内景観整備事業そのものについてのヒアリング調査を実施した．調査結果はヒアリングデータとして書き起こしを行った後に，4. (4) でのゴミステーションに関するヒアリング調査結果に対して行ったのと同様の，グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析を実施した．

以上の分析により得られた，「各集落の花壇の場所決定」という現象に対するカテゴリー関係図を**図-9** に示す．事業開始以前は各家庭や数軒単位の共同の管理の下で比較的小規模な花壇が整備されていた箇所もあったが，住民の景観に対する意識向上や外の地域からの来訪者を念頭に入れ，花壇の整備を始めとする住民独自の取り組みを支援する為の集落内景観整備事業が開始された．事業開始当初は各行政区

表-8　花壇の立地による類型

類型	特徴	
バス停隣接型（4件）	全件がバス停と隣接している．また，河川・水路やゴミステーション，墓地と隣接する箇所もあり全件が二車線未満の道路に隣接している．	
主要道路分岐点立地型（17件）	ゴミステーション（29.41%）やバス停（17.65%），集会所などの公共施設（11.76%）などと隣接し，88.24%と9割弱が分岐点に立地し，残りは道路脇に立地している．	
公共施設隣接型（10件）	半数が集会所や消防団施設，公衆トイレなどの公共施設と隣接し，3割が河川・水路と隣接している．	
消防設備隣接型（3件）	全件が消火栓およびホース格納庫に隣接しており，なかには更にゴミステーションや河川・水路と隣接している箇所も見られる．	

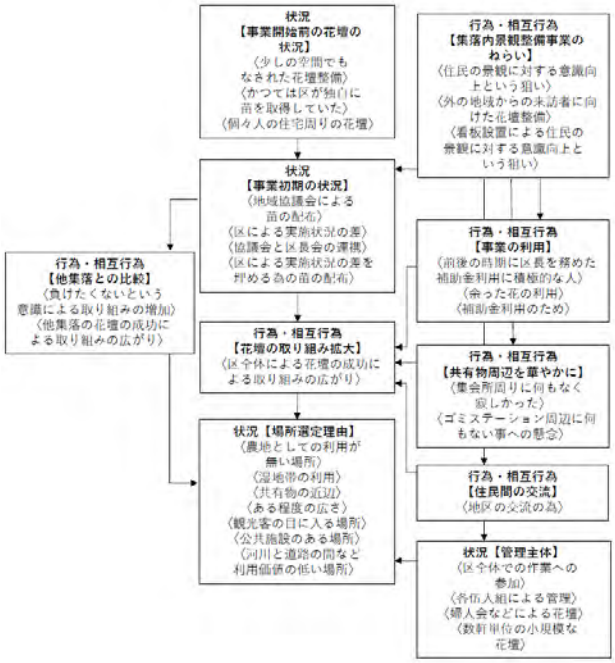

図-9　ヒアリングによる各集落の花壇の場所決定に関するカテゴリー関係図

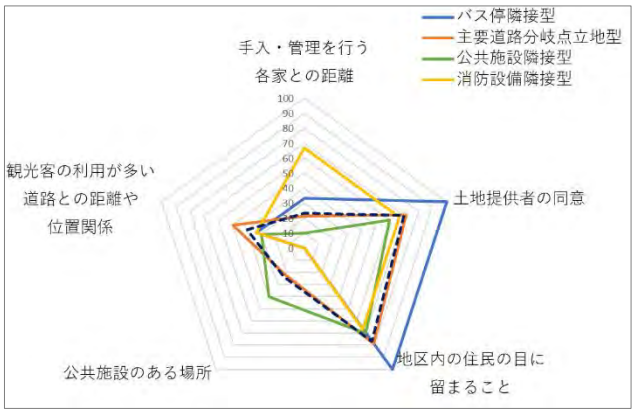

図-10　花壇の類型ごとの立地選定理由

表-9　各類型の管理主体，作業時に意識する事，管理状態

	管理主体			作業時に意識すること					管理状態	
類型	全世帯	伍人組	老人クラブ	区の交流	地区住民	観光客	地域環境美化	事業の活用	良好	不良
バス停隣接型	○			○	○	○				○
主要道路分岐点立地型		○				○			○	
公共施設隣接型		○		○	○	○			○	
消防設備隣接型	○	○	○		○	○			○	

につき 1 箇所の花壇の整備が想定されていたものの，先に整備された花壇が刺激となったり，集会所や公共施設の周辺に花を植えたいという声から，行政区の管理下だけでなく伍人組の管理下にある花壇が増加した．その際の花壇の設置場所としては，農地としての利用が無い場所，共有物の近辺，観光客の目に入る場所，河川と道路の間などの利用価値の低い場所などが選定された．

(3) アンケート調査による花壇の立地特性

花壇に対しても，ヒアリング調査および現地調査ではその立地および選定理由に関して得られる情報は限定的であった為，2022 年度に集落内景観整備事業の一環として整備された 15 行政区の全花壇を対象として，場所の選定理由や現在までの場所の変更，現在の管理主体などを問うアンケートを実施した．**図-10** に(1)で得られた類型ごとに，アンケートの回答として得られた各場所の選定理由の選択割合を示す．分類された花壇が 10 箇所以上ある「主要道路分岐点立地型」「公共施設隣接型」に着目すると，前者はほとんど全体平均と似通った選択割合であるが，後者は手入れ・管理を行う各家との距離の項目が選択された割合が平均よりも低い点が特徴的である．また，各類型間の比較の為に，管理主体，作業時に意識すること，管理状態についてより多い箇所を丸印で示したものを**表-9** に示す．この表からは，バス停隣接型は全世帯による管理が多い点，主要道路分岐点立地型は観光客への意識が強い箇所が多いなどの各類型の特徴が読み取れた．

6. 結論

(1) 本研究のまとめ

本研究の成果を以下にまとめる．

- 住民によって建設されてきたゴミステーションの形状には 7 つのバリエーションが見られ，各集落の意思決定の反映が見て取れた．
- ゴミステーションと花壇の立地にもまたバリエーションがあり道路との位置関係及び隣接物の特徴から前者では 5 つの類型，後者では 4 つの類型を得た．
- 両者の立地の違いには，公的共有物との隣接が多くそれ自体が公的サービスの媒体であるゴミステーションと，国道や集落内の主要な道路沿いを華やかにする為の花壇というそれぞれの特徴が現れていた．
- ヒアリング調査によってゴミステーション及び花壇の立地選定の際に考慮された事項を把握し，前者では集落や住宅との位置関係が重要視され，後者では観光客や公共施設，利用価値の低さが主要な項目であった．

また，開田高原におけるゴミステーションおよび花壇が有する立地や形状にバリエーションが生まれた背景には，いずれも住民自らが手を入れることのできる共有物であるために住民間での意思決定が行われてきたという事実と，そのための住民らによる話し合いや実際の建設行為が実現するような自治のなされてきた場所であるという特徴が改めて読み取れた．

(2) 今後の展望

現在，対象地である長野県開田高原では他の農山村地域の例に漏れず人口減少が進み，今後はそれに伴う集落の形態の変化も起こり得るものと考えられる．同時に蓄積されてきた景観施策をこれまで同様に継続していくことが困難になるような状況も想定されよう．その上で本研究の結果はゴミステーションと集落内景観整備事業による花壇という非常に限定的な地物の立地特性を捉えたものであったが，今後も対象地においてこれまでの取り組みや，その大元にある住民同士の関係性を維持していく為の方策を考える際の参考となることを期待する．

＜参考文献＞

1) 木塲佳音，杉田早苗，土肥真人：個人の大切な場所が織りなすまちの構造の研究ー大岡山・千束地区を対象としてー，日本都市計画学会都市計画論文集 Vol.56,No.3，pp.975-982，2021
2) ランドルフ・T・ヘスター著，土肥真人訳：エコロジカルデモクラシー　まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン，鹿島出版会，2018
3) 張平星：石仏の安置場所からみる京都の若狭街道沿いの集落と道の関係性，ランドスケープ研究，85 巻，5 号，pp.613-61820222022
4) 轟慎一，中村攻，木下勇，渡辺和夫：集落空間における環境構成要素間の連関についての考察，ランドスケープ研究，59 巻，5 号，pp.241-244，1995
5) 北澤大佑，藤本信義，齋藤雪彦：農村景観の保全形成に向けたデザインコードの読み取りとその意義，農村計画学会誌，28 号，pp.297-302，2010
6) 大澤啓志，谷藤圭悟：栃木県那珂川町小砂地区の農村集落景観の特徴と審美的原理，ランドスケープ研究 82 巻 5 号，pp.605-610，2019
7) 藤倉英世，山田圭二郎，羽貝正美：基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する実証的研究ー長野県旧開田村の景観を巡る政策郡を対象としてー，土木学会論文集 D3(土木計画学)，Vol.68，No.3，pp.160-179，2012
8) 藤倉英世，山田圭二郎，羽貝正美：地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発現に関する実証的研究，土木学会論文 D Vol.66 No.3，pp.394-413，2010.9
9) 戈木クレイグヒル滋子：グラウンデッド・セオリー・アプローチ実践ワークブック，日本看護協会出版会，2010